

## 親鸞の衆生観

加来 雄之

仏者は、みずからが宗とする教典によって獲得する〈衆生〉観にもとづいて、自己と他者と世界を把握し、この濁世に住まう。親鸞は、『教行信証』等の著述において、濁世を如来の光明の中で生きることを表現する〈衆生〉を、如来による〈衆生〉として徹底にあきらかにすることに努めている。この如来による〈衆生〉が明瞭にならなければ、〈衆生〉理解が実体的なものにとどまり、如来という深みからの世界や他者や自己を把握することができず、結果、濁世に正しく住まうことができないからである。

親鸞は、「如来の四十八願をときたまへる経」（『尊号真像銘文』）としての『大無量寿経』に展開する〈衆生〉の諸相を、如来による〈衆生〉という視座から体系的に記述する。『大無量寿経』は、真実についての語りと方便についての語りとが併存する。真実の語りとは、曇鸞のいう、仏の立場からの語り、「利他」の語りである。この如来の利他を「我」が経験として論じるのが『浄土論』である。その註釈『浄土論註』は、如来が「一切苦悩の衆生」にはたらき出る「回向」の相を、往相・還相の二種に分けた。これらが親鸞の独自の〈衆生〉観の基礎となる。

親鸞は、「如来としての衆生」（安田理深）の真実相を、『無量寿経』の第十八願文の「十方衆生」と、その成就文に「諸有衆生」に見いだした。この「衆生」をプロトタイプとして、親鸞の著述に展開するさまざまな〈衆生〉（群生、群萌、仏、菩薩、凡夫など）の説相がもつ意味も確定できる。また親鸞の如来による〈衆生〉観を豊かなものとする上で『涅槃経』が重要な役割を果たしたことも忘れることはできない。如来による〈衆生〉観は、以下の意義をもっている。

まず如来による〈衆生〉観は、〈衆生〉を「流転の衆生」と「還滅の衆生」という絶対的に質が異なる二種の〈衆生〉に分かつ。この流転の衆生としての自身という深い信知が親鸞の〈衆生〉観の特徴である。

- ┌ 「流転の衆生」 凡夫（穢土）
- ・如来としての衆生（一）└
- └ 「還滅の衆生」 仏・菩薩（浄土と穢土）

・この流転と還滅との絶対的に異なる二種の〈衆生〉は、如来の本願によって不二の関係として結びつく。親鸞は、この如来と衆生とを関係づける原理を、「如来本願力回向」として言い当て、往相の回向と還相の回向との二種として体系化する。往還の二回向はそれぞれの〈衆生〉観を有している。

- ┌ 往相の回向における〈衆生〉
- ・如来としての衆生（二）└
- └ 還相の回向における〈衆生〉

往還の二回向のそれぞれの課題における、浄土の〈衆生〉と穢土の〈衆生〉との関係があきらかになる。この往還二回向の〈衆生〉観があきらかになることによって、はじめて私たちは濁世において正しく他者を把握し、関わるができる。

- ┌ 真宗を興こす〈衆生〉
- ・如来としての衆生（三）└
- └ 仏法を毀滅する〈衆生〉

親鸞が専修念仏弾圧や善鸞事件や災難などこの世のあらゆる出来事を如来のはたらきに映るものとして受けとめることができたのは、親鸞の現実把握に如来による〈衆生〉観が浸透していたからである。